

南進のまなざし

明治二〇〇三〇年代におけるフィリピンの描き方

山下美知子

はじめに

昨年フィリピンは、独立共和国誕生(一八九八)の一〇〇周年を、国を挙げて盛大に祝った。アジアで最初の民族解放の闘いと独立の達成は、今もフィリピン人が誇りとする歴史である。本稿は、その当時の日本が、独立運動前後のフィリピンをどのように意識し、位置づけ、描いたかについて考察する。

フィリピン革命(一八九六)と日本との関係については、Samuel(一九六九)、波多野(一九八八)、池端(一九九六)、早瀬(一九九六)らの先行研究がある。それらは基本的に歴史研究であり、日比間に具体的にどのような関係、交渉、出来事があったかを究明している。

それに対して、私が似たような問題を異なった視点からとりあげるのは以下の理由による。ひとつは、明治二〇年代初から三〇年代末にかけての二〇年間ほどのあいだに生じた、南洋への関心と認識の変化を、フィリピンにおける革命を題材とした評論や小説によって考察することである。柳田の言を借りれば、「南進文学は、フィリピン中心といってもよいほどに、日本人の心はフィリピンの問題に集中されていた(1942:109)」のである。したがって、フィリピンを扱った代表的なテキストを取り上げることは、南進をめぐる言説の展開の縦糸をたどることと言える。

この時期は、日清戦争と日露戦争をはさみ、日本が急速に「国際化」してゆく時期であった。いっぽう、フィリピンにおいては、スペインに対する改革と自治を要求する運動が、独立を企てる革命へと発展し、共和国の樹立を果たした直後に、アメリカの介入侵略に敗れて新たな植民地支配を受けてゆく過程であった。当時の日本およびフィリピンをとりまく政治経済的な状況が、それらのテキストに色濃く反映している。と同時に、逆にそれらのテキストが日本人の具体的な南洋イメージと南進の気分を醸成していったのである。しかし、フィリピンにおけるアメリカの植民地支配が安定する明治四〇年前後にフィリピンへの関心も薄れ、かつ北方ロシアへの対抗の必要から、南洋への関心も失われていった。

本稿のもうひとつの理由は、その当時に描かれたフィリピンと現在の日本におけるフィリピン・イメージとがきわめて近似していることを示すためである。その際、フィリピンに対する南進の眼差しを、新興日本のナショナリズムや植民地主義の反映であるという当たり前の指摘をし、その表象のオリエンタリズム(サイード、一九八六)を弾劾するだけならば、戦後の新生日本をそれとは切れた別な社会として免罪する結果に終わりがねない。そうではなく、現在にいたるまで一貫して変わらぬ

フィリピン・イメージの、忘却された起源に着目することによって、逆に、フィリピン言説の再生産が構築してきたフィリピン像を再考し、今後新たなフィリピン理解の可能性を模索する契機とするためである。

取り上げるのは、菅沼貞風「新日本の図南の夢」(一八八八—明治二二)、末広鉄腸『南洋の大波瀾』(一八九一—明治二四)、山田美妙『あぎなると』(一九〇二—明治三五)、さらには押川春浪の『海底軍艦』(一九〇〇—明治三三)に始まり『武俠の日本』(一九〇二—明治三五)を経て『東洋武俠団』(一九〇七—明治四〇)まで続く武俠六部作などである。

二五歳でマニラに客死した菅沼の著作は、海外植民の対象としてフィリピンに着目し、その植民の具体的な方法について論じたものである。鉄腸の小説は、横浜からアメリカを経てイギリスに至る旅においてたまたま同道し、意気投合したホセ・リサールの話に触発され、実際のフィリピン革命と共和国の成立よりも以前に、反スペイン運動から独立にいたる波瀾万丈を小説の形で夢想したものである。美妙の小説は、フィリピン革命の挫折とアギナルドの捕縛を悲憤し同情し、革命の顛末を写實的に描いたものである。押川の作品は、日本海軍の桜木大佐が、絶海の孤島で建造した海底軍艦で海賊船団を壊滅する顛末から始まり、フィリピン革命でアギナルドを助けていた西郷隆盛がアメリカの陰謀によって捕らえられ、ロシアに引き渡されてシベリアの奥地に幽閉され、それをライオンを連れた蛮勇無双の段原剣東次が空中軍艦(飛行艇)の支援を得て救出するという、ヨーロッパ、南洋、アフリカ、シベリアと世界をまたにかけた気宇壮大な物語である。それぞれの作品の執筆時において、各著者は、フィリピンへの

渡航滞在経験はない。したがって、著作の内容は、おもに日本において得られる限られた情報にもとづき、各自が自由で勝手な思い入れを込めて、フィリピン社会、とりわけそこでの「革命」のなかに、いわば各自の「夢」を仮託したものである。そうした彼らの「夢」に見られる、共通点と差異について論ずることをとおして、日本にとってフィリピンがいかなる他者であったかを考察してゆく。

1 南洋へのまなざし

矢野によれば、「南進論」とは、日本の近代外交における、「南」に向かって出る論理を汲み上げ、理論化し、そして正当化してみせる「発言」群のことである(1996)。¹そして南進論と不可分に結びついているのが南洋を舞台とする海洋小説であり、その両者が登場してくるのは明治二〇年である。たとえば、南洋を舞台とした政治小説である、後藤南翠の『旭章端』、久松義典の『南溟偉跡』、小宮山天香の『冒險企業・聯島大王』、あるいは南洋航海の見聞録である志賀重昂の『南洋時事』などが、この年にあいついで出版された。

そうした南洋に対する関心や情熱の背景には、次のような事情がある。前年八月の長崎事件(清国水兵暴行事件)や一〇月のノルマントン号事件をとおして、清国やイギリスによつて日本の主権や邦人保護がないがしろにされたのは、軍備とりわけ強大な海軍を保有していないためであるとの一般的な認識が生まれた。また、ドイツがマーシャル全群島を保護領としたのも明治一九年である。その一年前の明治一八年には、日本と朝鮮とのあいだの巨文島をイギリスが一時的に占領した。そうした

直接、間接の危機感をとおして、海への強い関心が生じてきた。さらには、フランスで建造した巡洋艦**歐傍**が日本へ回航する途中、明治十九年十二月にシンガポールに寄港した後、フィリピン周辺海域で消息を絶った事件がセンセーショナルに報道され世間の関心を集めた。また、海軍の練習艦による遠洋航海訓練に、広報の一環として民間人の便乗を許す制度ができ、志賀重昂は明治十九年の二月から一〇ヶ月にわたり、南洋諸島からオーストラリアへの航海に同行している。その見聞が先にあげた『南洋時事』としてまとめられたのである。

明治二〇年の三月には、明治天皇から海防の詔勅が出され、「海防のことは一日も忽せにすべからずという」言葉とともに内帑金三〇萬円が下賜された。時の総理伊藤博文は、軍民ともに力を合せ海国日本の理想の完成をめざすべしとして、海軍装備の拡充のため献金その他の全国的な運動を推進した。また、フィリピンにおけるスペインからの自治獲得運動に関する情報によって、志士あるいは浪人と称される人々がフィリピンの情勢に関心を持った（柳田 1942:18-23）。

もう少し広く、南進文学あるいは海洋文学に関しては、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』とジュール・ベルヌ『海底旅行』のいちばん良い訳が出たのが明治一六年であった。それ以前、明治初期から数種類の翻訳が出されているが、一六年版が広範な人気を博したのである。その際、ロビンソンの一般的な解説としては、日本が海の国であるから、その成長発展のためには内地だけでは納まらず、ロビンソンがしたように海外の無人島を開拓しなければならぬ、というものであった（ibid.:15-16）。

実際、先にあげた最初の南進小説である『旭章端』、『冒険企業・

聯島大王』、『南溟偉跡』のいずれもが、南洋に無人島を見出し、探検し、それを日本の領土とするという共通のテーマをもっている。無人島であることは、南洋に勢力をもつ欧州列強との直接的な衝突を避けようとする意図が働いている。たとえば、この三冊のうち実に「痛快極まる小説」として柳田が称賛する『冒険企業・聯島大王』のあらすじは、以下のとおりである。

退役軍人の大東一郎は、横浜で英国の水兵と水泳の競争をして勝ち、何千円か何百円の懸賞金を手に入れる。たまたま、南洋から砂糖を積んできた船が、横浜の港口で難破して積み荷ごと安く売りに出されたので、その懸賞金で買い取る。近所の漁師たちに好きなだけ砂糖を取っていいと伝えたら、筏で砂糖を運び出した。すると、座礁した船が自然に浮き上がったので、浦賀ドックで補修をする。

その後、様々な品物を積んで南洋貿易に出かけ、オーストラリアのメルボルンで商売をする。儲けた金で、現地の安い石炭を船一杯に買い込み、日本に戻る。途中、台湾近海で清国とフランスの戦争にぶつかり、軍艦の燃料不足に悩むフランス軍に石炭を高く売りつけて大儲けをする。上海に寄港しようとしたら、清国の機雷に触れて沈没する。そこで、ぼろ船でなく立派な船であったと談判して、新しい船を手に入れる。

さらには、清国の高官から、海岸を封鎖されているので、代わりに上海から台湾まで食糧の米を運ぶように依頼され、高額の運賃をもらって引き受ける。結局、ぼろ船で横浜を出たのが、帰る時には何百萬か何千萬かの大金持ちとなっている。その資金を元手にして商会をつくり、南洋のいたるところで無人島開拓をおこない、その王様となる。

このような、貿易による進出、平和的かつ商業的な南洋雄飛は、志賀がまさに強調している点であり、『南洋事情』の結語を「海外到ル処ニ商業的ノ新日本ヲ創造スルコソ、汝ガ今日ノ使命ナレ、汝ガ今日ノ急務ナレ」と述べている。さらには、次節で取り上げる菅沼貞風の主張とも重なりあっている。

2 南進論の先駆け―菅沼貞風

矢野（一九七九）は、明時期の代表的な「南進論」者として七人をあげているが、なかでも菅沼の『新日本の図南の夢』を高く評価し、「『南進論』とふつういわれるイデオロギーの、いわば模範答案みたいなもの（二〇）」、あるいは「内容の充実といい、また文章の密度といい、あまたの『南進論』関係の作品のなかでは群を抜いたもの（二一）」であり、「おそらく、近代日本が生み出したもっとも戦闘的で、扇情的な『南進論』ではあるまいか（二二）」と位置づけている。

菅沼貞風は、慶応元年（一八六五）三月一〇日に肥前平戸の微禄藩士の家に生まれる。幼少時から儒学を学び、一六歳のときに選ばれて藩侯の諸公子の侍伴となると同時に、猶興書院に入る。明治一七年九月に東京帝国大学古典講習科漢書課に入学し、明治二一年七月に卒業した。その卒業論文『大日本商業史』は、「太古の時代」から「上古の時代（遣唐使並に其廃止後の時代）」、「中古の時代（海賊の時代）」、「近古の時代（欧州貿易の時代）」上・中・下「まで、すなわち徳川期の鎖国に至るまでの、対外貿易・商業の通史となっている。

膨大な漢籍資料を駆使した充実の内容が高く評価され（明治二五年に「東方協会」の最初の出版物として公刊）、卒業後ただち

に東京高等商業学校に教職を得たが、半年で辞表を出し、明治二二年四月にマニラへと渡る。日本領事館に寄寓し、三ヶ月たらずのあいだ各所への見聞調査を精力的に行い、帰国直前の七月六日にコレラで急死し、マカティの外国人墓地に葬られた（矢野三六〇）。

その著作のなかで、菅沼は、「近古の時代・上」において「朝鮮征伐の徒勞、呂宋経略の雄図」という節を設け、太閤秀吉が朝鮮へと出兵したことは策の誤りであり、当時すでにフィリピンへと向かうべきであったと主張する。すなわち、マニラ・アカプルコ貿易の商船に便乗して、フィリピンへと何度か出かけたことのある原田孫七郎が、秀吉にフィリピンへの出兵を進言した。出兵のため口実作りとして、原田は、マニラ総督に朝貢を要求して挑発する策を進言したが、実際の要求に対して、マニラが挑発に乗らなかつたために実現しなかつた。

秀吉の時代にフィリピンへと向かう可能性が実際に存在した事実を指摘したのち、菅沼は現在でも、朝鮮・中国へと向かう北進の策ではなく、南へ、とりわけまずフィリピンへ植民してゆくことを説く。すなわち、

支那は我と舊好あるの国、地広く民衆し、是を以て援となすべくして興に鉾を争ふべからざるなり。蓋し興に鉾を争ふべからざるにあらざれども、両虎の相闘ふや一は弊れて而して一は傷かん。強敵の其隙に乗ずるものあらば之に處する極めて難かるべし。夫れ既に支那と闘ふは不得策なりとせんか朝鮮は即ち我と支那との牆壁なり。之を撤去して禍根を培養する豈永遠の利益ならんや。縦令之を取るに易からしむるも

之を守るや実に難し。寧ろ呂宋は懸海の地、一たび之を取れば之を守る甚だ易く、外は境界の争論を招くの患なく内は海軍の威力を練るの益あるに若かんや。且つ呂宋の南、ミンダナオ、ミンダナオの南、瓜哇、スマトラ以てマラッカ半島の東端に至るまで漸く之を蠶食して新嘉波の海峡を扼せば、一は以て支那の頭尾を検束して勢禁形格するに足り、一は以て欧州諸国の東洋に於ける威力を殺ぎて日本の国境を固守するに足る(282)。

『大日本商業史』が、対外交渉・商業・交流の通史、学術研究書であるのに対して、「新日本の図南の夢」(明治二年)は、菅沼の持論を存分に披瀝した対外政策論となっている。具体的には、そのタイトルが示すように、「年毎に増加する同胞三十餘萬人を移植すべき餘地と、我国が欧州の諸国に向かつて対等の權利を以て相交際するに足る形成を組成すべき新版圖とを得んと欲する(283)」がゆえに、それを実現するための策を構想するものである。代表的な南進論であり、近代日本のフィリピン観に通底する庇護者的な介入の欲望を露骨かつ端的にしめしめて興味深いゆえに、まずその論を詳しく紹介する。

菅沼の問題意識は、欧米列強が次々にアジア進出を果たし、日本もまたその餌食となる可能性がある現時点において(1)、いかにして不平等条約を改正し、「前途を横絶せる大難を排除して永久に完全なる国家の體面を維持(284)」するかにあった。

そして国際社会においても「優勝劣敗は天地自然の大法にして弱肉強食は人生現有の通勢」であるがゆえに、「国家の生存を永久に保持」しようと欲するならば、「国民各自をして富強ならしめて以って自立の基礎を鞏うせざるべからず(284b)」と主張する。

しかし我が国をかえりみるに、人口の増加は著しい一方で、土地が限られているために、一人当たりの衣食の材料は次第に減少してきている。それゆえ、「吾人預め意を決して海外に出稼ぎするにあらずんば遂に凍餒の苦あらん(284c)」と危惧するのである。

続いて菅沼は、「移住の自由は人生天賦の最大權利なり」と主張する。しかし実際には、ハワイのアジア系移民の排斥にも見られるように、既得権益を有する列強の拒絶や反発という困難を予想する。そこで一步を譲って、たとえ出稼ぎの自由を制限するにしても、商業を盛んにして国家を強くすることの重要性を主張する。ただし、商業には「受身の貿易」と「働掛の貿易」の二種類があり、我が国の従来の貿易は、鎖国の影響によって先方が商売にやって来るのをただ座して待つだけであった。しかし、これからは、「我買わんと欲する所のは自ら産地に往きて之を買ひ、我賣らんと欲する所のは自ら消費するものは自ら消費者を求めて之を賣り、且之を運送するも亦自国の商船を以て」すべしとして「働掛の貿易」の振興を説くのである(284d)。

しかしながら、そうした自由貿易を行い日本が東洋貿易の中心となることは、欧米列強の抵抗を招くことになるから、その実現のためには、たとえば英国のように「国旗の力を以てすること」を主張する。すなわち、海外交易を振興し保護するためには海軍力の増強を説くのである。その具体的な実現方法として菅沼が提案するユニークな戦略は、現有の二十数隻と建造中の数隻の軍艦を、計一〇〇隻の大艦隊とするために、イギリス銀行から三分の金利で資金を借り、それで欧米から現物の軍艦を七〇隻買うというものである。彼の計算によれば、大小各種の

軍艦の平均が一隻一五〇万円として、七〇隻の総額は一億円となる。

一兩年のうちに軍艦を手に入れたら、早速に条約改正を要求し、以つて関税を引き上げる。現行五分の税率を、二割とするだけで、一五〇万円の歳入は四〇〇万円へと増大し、もつて利子を含めた借金の返済を三七年で終了するといふものである。

果たしてイギリスが日本の軍備増強のために資金を貸すのか、欧米列強が本当に軍艦を売るのか、実際の可能性は極めて低く、ほとんどゼロに等しいであらう。しかし、さらに、菅沼の夢は広がる。

すなわち一〇〇隻の軍艦があれば、フィリピンを領有するスペインの海軍を容易に破ることができる。なぜなら、スペインの保有する海軍は外輪風帆浮砲臺をあわせて一二四隻であり、そのうち植民地の防衛に準備するものは小砲艦三五隻にとどまる。しかも、それらをアフリカやアメリカの植民地に分散しているため、フィリピンに派遣しうるは、たかだか二〇隻あまりにすぎない。すなわちフィリピンこそは、英独仏露そして昼寝する巨象である中国との直接対決という危険を避けて進出できる脆弱地域であり、「豪州の航路に接し、将来商業の隆盛ならんことを欲せば、必ず必ずここに商船寄泊の良港を有せざるべからざるをや」(556)なのである。

ただし、フィリピン諸島を略取する名目のないことを菅沼も認める。したがって、まずは、人生最大の権利である「移住の自由」を活用して、「這般に向かつて移住を企て之を保護するに国旗の力を以てするも亦何ぞ不可ならんや。一朝時至り機会大に熟せば我國の国権を維持するがために、是等の諸島を占領するの必要は

忽ち其の名と共に生ずべし。…東洋の覇国たるは夫この策にあるのみ」(559)と主張するのである。

二部構成の第一部「龍の巻新日本を構成せよ」において、以上のような植民政策の概要を示したのち、第二部「虎の巻舊日本に愧づる勿れ」においてはフィリピン植民の具体策を説明する。まず、『大日本商業史』で言及した原田孫七郎の秀吉への図南の進言、さらには徳川幕府の初期において肥前島原六万石の領主となつた松倉豊後守の図南の説について、それぞれ一章を立てて内容を詳細に紹介し検討したのち、「第三章前車の覆轍を踏む勿れ。何ぞ早く出稼会社を組織せざる」のなかで、次のような植民策を主張する。

すなわち、日本国民の長所は、商業ではなく農業にあるから、日本人移民には砂糖、麻、煙草などの特産物の生産に当たらせる。そして彼らの日用必需品を日本から運び、またその産物を売り捌けば海運も盛んとなり、東洋貿易の中心へと成長してゆく基礎となる。具体的には、とりあえず、壮丁九万人をもつて軍隊を編成してフィリピンに送り込み、二五〇人を一中隊として全国に住ませ、とりあえずは「奴僕農工百般の賤役に従事して以て其の機を待つ」という策である。

なぜなら、西欧各国はその本国において自由を貴び、権利を重んずるにもかかわらず、実際には植民地の人々に重税を課し暴政を行つており、とりわけスペインの本国政府による暴政虐待が最も甚だしい。それゆえ、近々中に反乱が生じ、事態が以下のように進展するといふのである。

此に在ること一二年の内には必ず残虐の以て天下に表白す

るものあらん。此の時こそ吾人のために千載一時再び来らざるの機なり。この機に際して吾人のこの島の四邊に散在するもの一時に蜂起し檄を天下四方に傳ふること米國獨立の日の如くし、預約に順て將師の命を聴き、一挙して彼の本國代理政府を倒し悉く暴政虐令を排し、苛税重斂を除かば、四百有豫萬の民大旱の運甕を望むが如く、其の婦女は簞食壺漿して軍を犒ひ、其の男子は雀躍抃舞して軍に従ひ、數朝を出でずして事大に定らん(182-3)。

本来ならば、氣候良く食糧多く「勞せずして以て生を営む」ことのできるニューギニアを日本は取るべきであつたが、「鎖國の殘夢」に恍惚た日本は國際戰略もないままドイツに横取りされてしまった。ついては、フィリピンこそが「所謂天公が暫く他人に預置ける新日本の好版図(1891)」であり、白人に略取されることのないよう、「舊日本に愧ぢぬ」よう、かならずやそこを手に入れるべきと力説するのである。

ここで注目すべきは、ハワイに移民した日本人労働者の質が、たとえば、その中国人やポルトガル人の労働者と比べて、決して優秀ではないことを菅沼が率直に認めていることである。彼によれば日本人には、以下のような労力の微弱という欠点がある。すなわち、(一) 持続的な労働に慣れず疲労困憊しやすい、(二) 牛馬の使用に慣れずこれを畏怖する、(三) 耐忍不倦の氣質で両國人に劣る、(四) 事業の練熟でも及ばない、(五) 軀幹の大ききでも劣る。しかしながら、それらの欠点は、体軀の問題を除けば、(一) 競争心に富み、(二) 愛國心に富み、(三) 土人と親密である、の三つの利点を活かした努力によって克服できるとしている

(18486)。

こうした菅沼の認識は、たとえば、幕末に結ばれた不平等条約を改正するにあたって起きた内地雜居論争において、条約改正の後も外國人の國內混住や土地取得を認めないと主張する井上哲次郎の認識と共通である。井上は、東京帝國大學哲学科卒業後に二七歳で同大學哲学科助教教授となり、その後ドイツに留学して歸國後に教授となったエリートである。教育勅語の公認解説書を書いた國體論者としても知られている。その彼がドイツ留学中に著わした『内地雜居論』(一九八九)は、雜居に反對する理由として、その身體測定値にもとづけば日本人は歐米人はもちろん、「支那朝鮮二國の人よりも矮小」な「婦人小兒」のような存在であり、内地雜居は「微弱なる童子」が「壯士と格闘」するようなものだといふのである(小熊394)。

それゆえ、「劣等人種」であり、ただ日本においてのみかろうじて生きてゆける日本人が、もし外國人と混住雜居すれば、日本の土地さえも奪われて住む場所を失つてしまうと危惧するのである。その劣等である理由について井上は「日本人の先祖が南洋より渡来せる」という説を提出している(ibid:414)。(内地雜居論争はその後雜居支持派が優勢となり一八九九年に不平等条約が改正される)。

菅沼の主張は、弱き日本および日本人を自覚しつつ、弱肉強食の世界にあつて、「小を変じて大となし、敗を転じて勝とする」ための窮余の策、大逆転のフィリピン植民・革命論として異彩を放っている。当時は、開國時に強要された不平等条約のもとで、日本には関税権もなければ、歐米人が罪を犯しても裁判権がない状態だった。日清戦争に勝利し条約改正をなしとげ

強国の自信をつけるまでの時期では、アジア辺境の弱小国である日本という自覚のもと、いかに独立を維持してゆけるかが、知識人にとって広範な問題意識になっていた。

その弱き日本が生き残りをかけて海外植民に出てゆく先の可能性として、フィリピンが着目されたのは、欧米列強のなかでは弱いスペインが領有し、圧政によって人々の不満が高まっているからであった。さらにフィリピンを領有することの正統性あるいは必然性は、末広鉄腸によって、日本人との血縁の絆の強調というフィクションによって補強されることになる。

3 同情と欲望あるいは植民地幻想——末広鉄腸

末広鉄腸は、ジャーナリストであり、自由民権運動の闘士であり、代議士であり、そして政治小説家であった。本節では、彼の人生の軌跡を柳田（一九六八）に依拠して簡略に述べたのち、フィリピンにおけるスペインの圧政に対する反乱と独立を主題とした小説『南洋の大波瀾』の内容について検討をする。

鉄腸は、嘉永二年（一八四九）二月に伊予の国、宇和島に生まれた。漢籍句読の教育を受け、早くも一一歳で四書五経を終えたという。明治六年二四才で上京し、翌七年の末より大蔵省に入る。しかし、すぐに職を辞し、八年二月に「曙新聞」の編集長として迎えられ、新聞記者としての華やかなスタートをきる。八年六月に讒謗律および新聞条例が發布されると、鉄腸は条例にひるむどころか返ってそれを激しく批判する。その結果として禁錮二ヶ月と罰金二〇円の官裁を受け、新聞条例最初の犠牲者となる。しかし、逆に法廷における言動の男らしさと主張の激しさによって、昨日までは無名の青年記者が一躍、言論壇の花形となったのである。

（柳田324c）。

釈放後、鉄腸は朝野新聞に移り、民権の発達と国権の伸長という従来の主張をいっそう激しく展開したため、九年二月に再び捉えられ、禁錮八ヶ月、罰金五〇円の判決を受ける。この八ヶ月のあいだに、鉄腸は念願の英語の習得に専念し、簡略な英書ならば理解できるようになった。筆禍による投獄およびそこで英語学習という体験は、後にリサールと親交を結ぶ伏線となった。

新聞記者として活躍するかたわら、明治一九年頃より政治小説を書き始め、『雪中梅』（明治一九）『落ち葉のはきよせ』（明治一九）『花間鶯』（明治二〇）を続けて発表する。それが好評をもって迎えられ、印税によって二二年四月欧米事情の視察に旅立つ。帰国は翌二二年二月一日、すなわち憲法発布の日であった。その横浜からサンフランシスコ、シカゴ、ニューヨークを経てロンドンにいたる旅において鉄腸は、リサールと同道したのである（ibid.340-48）。

明治二三年七月の第一回総選挙に愛媛六区から当選し、国会の開設とともに鉄腸の政治家としての新たな人生が始まった。しかし出立上がった国会は、藩閥政府とブルジョワジーの妥協・協力の産物であり、理想主義的なインテリである鉄腸にとっては、まったく満足のゆかないものであった。議会活動に失望した鉄腸は、それでも熱心な後援者におされて、二五年二月の第二回総選挙に立つも落選する。明治二七年の総選挙でも再度落選したのち、二七年九月の第四回総選挙に当選し、全院委員長として活躍する。しかし、じきに舌癌が再発し、さらには頸癌を患って二九年二月に四八歳の生涯を閉じる。

鉄腸の政治思想の基本は、封建武士階級のインテリとして学んだ儒教にある。彼がとりわけ強く共鳴した陽明学の知行合一説や事上練磨論などを柱にして、空理空論を排し、イギリス風の改新的自由思想を重ねたものであった。その具体的な政治論の中心は、自由民権論であった(以下:369)。ただし、それはあくまで、日本が国家として真の独立を達成し、維持してゆくための不可欠の手段と考えられていた。なぜなら、欧州の隆盛を東洋諸国の衰微と比較してみると、欧州ではたいがい立憲政治となって人民の参政を許しているために、人民の気象は活発で愛国の精神も旺盛となり、自然に富国強兵の途をあゆんでいる。しかし逆に東洋諸国のように人民に自由がなく参政権がなければ、独立活発の気象も生まれず、自ずと衰亡の途をあゆむことになる。鉄腸にとって自由民権は国権伸長と表裏一体のものとなっていたのである。

国権伸長のための方法として、鉄腸は、鹿鳴館に象徴されるような生活上の欧米化＝文明化によって欧米から対等な認識を得ようとする卑屈な路線や、逆に武力強兵主義を取って積極的にアジアに進出することで国権の拡張を実際に示し、欧米の日本軽視を改めさせようとする冒険主義的な路線をとるに批判した。それらに代わる妥当な選択として、当分はなるべく海外との交渉を避け、力を内部の改良に尽くし、物産を興し、工業を盛んにし、貿易取引によって国を富ませ、いわゆる自由政治を行って人民と国家の利害を一致させ、もって外海を防衛し国家の独立を保持することを主張したのである(以下:389-91)。(2)。

内政に専念して国力の充実をはかり、同時にアジアの合縦連衡をはかって西欧の侵略を阻むことを理想とする鉄腸にとつて、リサールとの面識・交流を通じて得られたフィリピンにおける反ス

ペイン闘争は、スペインに対する義憤とフィリピンに対する同情、連帯の念を呼び起こすものであった。

フィリピンの反スペイン闘争に関して鉄腸は、『南洋の大波瀾』(明治二四年)『あらしのなごり』(明治二四年)『大海原』(明治二七年)の三冊の小説を発表している。第二作は第一作の拾遺、第三作は前二作の修正改題であるので、まず、その内容を『南洋の大波瀾』にもとづいて概観する。

主人公の多加山峻は、相当の資産を有し教育を受けた生っ粋のマニラ人であり、一読書生としてほとんど世事を顧みずに暮らしていたが、スペイン太守の虐政とスペイン僧侶の横暴のひどさに憤激し、密かに同志を求めてフィリピンの独立を企てるに至る。ある日、騎馬のスペイン人から法外な侮辱を受けたので我を忘れて相手を追うが、見失い、雷雨にあつて廃屋に逃げ込んだところで気絶した美女に出会う。美女は、マニラの豪商、滝川某の一人娘の清子である。清子は、かねてスペイン人の拘置所長の譲治より思いを寄せられており、野外の散歩に出たところを、危うく譲治に暴行されるところを逃げ延びたのであった。

この出会いをきっかけに、多加山は滝川と懇意となり、互いにフィリピン独立のための地下運動を進めていることを知る。しかし、多加山が欧州の他の強国の支援でスペインからの独立を果たそうとするのに対して、滝川は、東洋の力で、主として日本の助力で独立を達成しようとする。革命の方法論の違いから、さらには滝川が、多加山の拳兵計画が血気に任せた無謀なものであることを忠告したことから、二人の仲は一時疎遠となる。

ある夜、滝川の家に強盗が入り、家宝の銘刀が奪われ、滝川は深手を負う（後に清子との結婚と財産の奪取を狙う譲治の差がねであることが分かる）。滝川は急いで多加山を招き、その死の床で、清子と結婚してこの家を継ぎ、その資金をもって革命の成就をめざすことを頼む。多加山もその懇願を受けて結婚を約束し、さらには時期早尚の勝算のない決起を控え、いずれ日本の支援を求めて決起することを誓う。

その後、多加山は、国事犯の検挙と恋敵の除去という一石二鳥を目的とする譲治の策謀で捕らえられる。譲治は、多加山を牢内で衰弱死させようと虐待するが、あと一息のところまで大地震が起ころ。運良く壊れた建物から多加山は脱出し、清子と会ってリンガエンへと逃げてゆく。そこから小舟で船出したところを、大嵐に襲われて小舟は転覆し、二人は離れ離れとなる。最終的には二人とも別々に救助され、パリで再会することになるのだが、それまでの紆余曲折は省略する。

多加山にかざれば、英国船に救助された後、香港の貿易商ウィリアムスから多額の資金とロンドンの知人への紹介状をもらう。独立運動のための活動の場をロンドンへと移し、『近世マニラ政略史』を著わして、独立のやむなきを主張する。また、大英博物館のガラス棚に納められている日本書籍の文字が、家に伝わる家系図の文字と同じであることから、祖先が日本人であることを察知する。さらには、大英博物館の古物室には滝川宅で強盗に盗まれた宝刀が展示してあり、多加山が事情を話して調べてもらったところ、それは譲治の命を受けて強盗に入った津山が売り払ったものであることが分かる。さらには、その宝刀が一五〇年ほどまえに高山右近という大名が、マニラに流されたときに持参したも

のであるらしいことも判明する。

ロンドンにおいて滝川や多加山の日本との関係が示唆されたのち、話はフィリピンにおける革命の成就という大団円を迎える。すなわち、まずフィリピンの極南にある寶籠（ほうろう）という小島の蕃民が兵器をとって決起し、スペインの兵を破ると、これと接近する不見花（ミンダナオ）島を始め、南部の諸島において激烈なる一揆が起きて、ルソン島内も不穏な情勢となる（3）。

この不穏の機に乗じて、多加山は、日本から支援に駆けつけた三〇〇人ばかりの壮士と香港で合流し、マニラへと攻め上がる。戦闘の次第は、香港に残った清子あての多加山の電報で簡潔に説明される。マニラ警備の軍艦は寶籠島を始めとする反乱を鎮撫するために一隻をのこして出払い、それも大風のために対岸の軍港に避難して、突入の進路を妨げるものがなかった。すなわち「一昨夜大風に乗じ、日本人と魔尼羅人の連合軍、不意に威瑠美に上陸し、松原にて戦争あり。――余は日本刀を揮ふて兵士を指揮し、――日本人は非常の勇気を現はして突進して敵軍を破れり。――本日より假政府を設けて緋笠濱群島の独立を布告し多数のために推されて都督の任を帯び候（ind:318-19）」

そして最終節である第五七回において、多加山は日本人に命じて家の系図を調べさせ、二五〇年前にマニラに放逐された高山右近が自ら記したものであることを知る。さらには、同家に伝わる宝刀を家老の滝川某に与えたことも判明する。そして清子を迎えて盛大な結婚式を執り行う。

多加山の「恩威並び行はれ国内に人望ある」ゆえに国王に推

戴されるが、それを固辞し、予想されるスペインの援軍との戦争に備えて、日本の保護を求めることにする。小説の最後は、以下のように終わる。

三百年も外国の支配を受けし人民を以て西班牙に抵抗することとは容易ならず、日本の国力は近來旭日の昇る勢ひあり、今度西班牙の兵隊と戦ふて勝利を得しも、全くは日本人の助に出で、我々の先祖も日本人なれば、緋笠濱全島を挙げて日本の附庸と為し、其の保護を受くるに若かずと、夫婦相談を極めて其の意見を国内の人民に問ひしに、之を賛成するもの多数なれば、日本の事情を知れる松本に数名の日本人を付け東京に赴かしめ、多加山夫婦の書翰を両陛下に呈せしかば、両陛下は此れを嘉納し、開期中なる帝国議會に向ふて緋笠濱群島を我が版図と為すことを諮問し給ひしに、両院とも最多数を以て之を賛翼し、遂に多加山を華族に昇せ、終身魔尼羅都督に任ぜられたり。…西班牙政府も日本と魔尼羅の二国を引き受けて戦争を開くは不利なりと思ひしにや、平和の談判に因り、南洋の群島を日本に譲與せしかば、南洋の大波瀾は茲に全く鎮定して、日章の国旗は古城の上に翻り(320-21)。

鉄腸が以上のようなフィリピン独立の政治小説をかいたのは、先にもふれたように欧米への視察旅行において、ホセ・リサールと親しく接したことによる。序文のなかで自身が説明しているように(4)、本書は、リサールの身の上への同情と、自由民権の言論人政治家としての連帯の意識から生まれ、想を練り書かれたことに疑いを入れる余地はない。リサールも鉄腸もその言論、執筆活

動によって政府を厳しく批判したことにより、政治難民としての脱出や投獄を余儀なくされたのである。鉄腸にとつてフィリピンがスペインの植民地支配を脱し、独立の国となることに何の異論もないはずである。

しかし先にみたように鉄腸の自由民権論は、民を元氣にして国を元氣にするための手段であり、最終的には鉄腸も国権伸長論者であった。その後者の立場からすれば、本書の前書きの最後の部分の意味するところが彼の本意であると考えられる。すなわち、「余は敢えて南洋の地誌風俗を瀉すにあらず。實中に虚あり、虚中に實あり。紙上に一の瘴烟蠻雨の土地を構造し、之に因つて余が胸中に鬱たる不平を洩らんとするに外ならざるなり。讀者幸ひに之を諒せられよ(1bid.:24)。」

すなわち鉄腸は、たまたまりサールと面識し、その境遇とフィリピンの現状に同情し、彼のためにその独立を祈ったかもしれない。しかし本書を読む限り、フィリピンの土地と人々の具体的なりアリティーをまったく欠いている。スペインの圧政も、第一回の冒頭篇において、「立派な家屋は皆んな外国人の所有物であつて、土人は大方豚小屋の様な家に住み、隣れ千萬な有様である。…貧乏な人民の膏血を絞つて三千余りの兵隊を養ふのは、…兵力を以て太守の暴虐を助け、国民の自由を奪ふのである(2:25)」などと述べるに止まる。具体的な描写といえは、冒頭でそうしたフィリピンの現状を概観したのち、主人公の多加山がスペイン人の騎乗する馬に乱暴に追い払われる場面や、議治が片恋慕する清子を我がものとするための強引で暴力的な仕打ちに限られる。男としてのフィリピンと、乱暴狼藉、落下寸前のフィリピンというジェンダー化を用いたレトリック

によつて、植民地支配を糾弾するだけである。

本小説は鉄腸にとつて、フィリピン側の身を寄せ、その運命を我が運命として彼らとともに悲憤慷慨し、彼らのために独立を夢想するだけのものではなかつた。リサルとの面識とならんで、この小説の執筆の動機となつたのは、明治二〇年代に入つて急速に高まつてきた日本の南洋進出の主張であつた。明治二〇年には、志賀重昂が『南洋時事』を刊行し、一三年には田口卯吉らが発起人となつた南東商会、横尾東作らの恒信社、二四年には快通社や日本吉佐移民会社などが設立された。そうした南洋進出熱の時代のなかで生きる鉄腸も、また進出の可能性を夢想したのである。

彼の主たる二〇あまりの政治小説は、二三年頃までが主に国会問題を中心においたものであるのに対して、同年に国会が開設されて以降は、主として国権伸長、対外政策、海外発展などの思想を中心としたものへと変わつていく(柳田 1968:108)。ジャーナリスト、言論人、政治家として時代の風向きを見るに敏なる鉄腸が、まさに時代精神である対外進出への政治的関心のもとに小説を執筆したのである。本小説は、彼自身が明言するように、彼の不満と批判を吐露するための、ひとつの寓話小説となつてゐるのである。

では、彼の不満とは何であつたのだろうか。その執筆当時の鉄腸は、初代代議士として、すでに世俗的な栄達を得ている。したがつて、それは個人的な地位や待遇に対する不満ではなく、彼の政治的な信条と日本の現実の姿との乖離をめぐる不満と考えられる。本作品中で、鉄腸は、登場人物の口を借りて、幾度か日本の現状の批判をしている。その中で最も明確に吐露されていると思

われるのは、フィリピンの独立をめぐつてどこから支援を得るべきかを滝川老人と議論する時の多加山の主張にある。すなわち、

此の群島の西班牙の属地になつてからも、日本人は絶えず入り込んで参り、アノ驪黄川の左岸の市街などは、最初日本人が開いたものであると云ふことです。此の地へ来て本国の風俗を棄てず、太守の命令にも服従せぬから、とうとう太守は日本政府へ掛合ふて放逐令を出したので、一時日本人が迹を絶ちましたものの、今では両国交通の道が開け、日本から此島までは十日余りで往来が出来、先々商業の見込みもあるのに、此節一つの領事館が出来たばかりで、誰も此の土地に渡海するものがありません。若し日本に羽翼を海外に展ばず氣象があれば、此の魔尼羅は云ふまでも無く、南洋諸島の間には日本の国旗が翻へる様にならねばならぬ筈です。ナンボ文学技芸が進歩しても、進取の氣象のない人民では、此の競争の烈しい世の中に、欧州諸国と対立して独立を維持することは出来ずまいから、私は日本の様な国を後頼みにするのは不安心と思います(222)。

これは、多加山の言葉でありながら、まさしく鉄腸が主張したかった点である。多加山はリサルその人でありながら、同時に鉄腸自身の政治主張を投入しようとしたために、小説の展開としては多くの矛盾や疑問を生じさせてしまふのである。たとえば、日本は頼むに足らずと酷評した多加山が、滝川老人に懇請され、何の躊躇もなく、革命の支援を日本に求めるように

なる。

さらには、リサールの求めるフィリピン人の独立革命と鉄腸が求める日本の国権伸長との矛盾を調停するために、多加山その人が日本人の戦国大名高山右近の血を引く直系の子孫であるとされる。それゆえ多加山に率いられた日本人壮丁の革命への加勢と、それによるフィリピンの解放独立の達成が、いわば母なる故郷への回帰として位置付けられ、フィリピンの日本への領属化が自然かつ当然のこととして正当化されるのである。極めて安易な解決といえはそれまでだが、本来並び立たないものを無理にでも両立させるためには、親族関係の絆を持ち込む以外に具体的な解決策は存在しないであろう。

革命指導者の多加山以外にも、たとえばスペインに絶えることなき抵抗と続け、最終的な革命の突破口となった寶籠島の住民もまた、日本人移住者の子孫であるとされている。しかも、スペインの支配を甘受しなかったことは、潜在的には飛び地としての日本の版図がそこにあったことを示唆するものである。ただし、それは、日本の介入と併合の必然性を説明するために鉄腸が思いついたプロットというよりも、同書の二年前に出版されている福本日南の『フィリッピンヌ群島ニ於ケル日本人』の影響あるいは流用が見出される。この本は、フィリピン群島の地誌を簡略に説明した後、スペイン人と同じ頃にすでに日本人がフィリピンへの移民を始め、すぐに三千余人に達したと指摘したのち、原田孫七郎の三度にわたるフィリピン渡航や徳川家康のフィリピン経略を詳述している⁽⁵⁾。そのなかで、ホロ島の人々を以下のように説明しているのである。

此日本人の後裔は果たして如何の状を為すや、今得て詳にせずと雖も、前にも記せし如く、現に此群島土人中の一種モロー人なるものは、其性質勇悍にして、巧に利顕劍を鍛練し、撃剣に妙なり、此人種はホローなる孤島に住して、同人種中の一酋長を戴き、動もすれば西班牙人と争闘を為せり、而して其争闘を開くに當りては、剽悍勇猛殆ど當る可からず、是を以て西班牙人も容易に手を下す能はず、然れども其西班牙人を殺害すること屢なるより、往年管理政府は群島の熟土人を指揮して、之を攻撃せしめしに、モロー人は一致団結して、花々敷防戦し、管理政府をして征服する能はさらしめたり、而して此人種の身幹、骨格、頗る日本人に類似せるもの有り、加之西班牙の宣教師にして、之を古昔移住の日本人の後裔なりとイフ者有りと、果たして然るや否や^(二) (13)。

4 同床異夢の革命―山田美妙

鉄腸の小説が出版された明治二四年(一八九一)頃は、フィリピンにおいて、スペインの圧政に抗議し、改革と自治を求めるプロバガンダ運動が最も活発に推進された時代であった⁽⁶⁾。

プロバガンダ運動から植民地解放を目ざしたフィリピン革命の勃発(一八九六年八月三〇日)、さらには独立宣言(一八九八年六月一二日)をへてフィリピン共和国の樹立(一八九九年一月二一日)にいたるまでは、フィリピンの歴史の最も輝かしい時代である。

しかし、キューバ領有をめぐる端を発した米西戦争(一八九八年四月二五日)は、フィリピンを舞台としても戦われ、アメリカ

カはパリ講和条約（一八九八年二月一〇日）によってスペインからフィリピンを割譲される。そこで大統領マッキンレイの友愛的同化宣言のもと、フィリピンへの積極的な介入を行い、挑発によって戦争を引き起こす（一八九九年二月四日）。米軍は最新鋭の装備によって革命軍を圧倒し、短時日のうちに植民地支配の地歩を固めていった。

フィリピン革命が勃発すると、日本政府および軍部は情勢の展開に強い関心を抱いたが、表向きの態度はあくまでも中立・不介入であった。当時の外交の最大懸案が条約の改正にあり、欧米諸国との友好関係の維持を第一としていたからである。しかし九八年に入って米西戦争の兆しが現れると、軍部はアメリカのフィリピン占領を阻止するために革命軍に積極的なてこ入れを行なった。その主眼は、革命政府の日本依存を強く影響力を確保するため、武器の払い下げ要請を行うよう誘引してゆくことと、日本軍の将校を作戦参謀として送り込むことであった（池端俊一）。

一方、フィリピン側も九八年六月にM・ポンセとF・リチャウコのふたりを革命委員会の駐日代表部として日本に送り、革命への支持と支援を求める宣伝や情報の収集、武器の払い下げ交渉などを行なわせた。とりわけ、M・ポンセはフィリピン問題に関心をもつ日本人のジャーナリストや政治家らと積極的に交流し、革命の経緯を説明し、その正当さに対する支持を求めた（ibid.:22-30）。

そうしたフィリピン側からの働き掛けに対して、小説や評論の形をとおして積極的に応え、革命の紹介や支援をしたのが山田美妙である。

山田美妙は明治元年（一八六八）東京に生れ、大学予備門在学中の明治一八年に幼馴染の尾崎紅葉や石橋思案らとともに硯友社を興し、機関誌「我楽多文庫」を創刊する。坪内逍遙の「小説神髓」に大きな影響を受けて文学改良主義者となり、勧善懲悪という旧来の小説形式の破壊や、言文一致運動の実践、韻律論の展開（『日本韻文論』）、国語辞書の編纂などにおいて多大の貢献をした。

東大文科に入学許可となった明治二〇年、読売新聞に連載した「武蔵野」は新しい文体をもった清新な作家として好評を博し、翌二一年には、大手出版社の金港堂から創刊された文芸雑誌『都の花』の編集長として迎えられた。しかし、その際、美妙は硯友者の盟友たちに何の相談もしなかったために紅葉らの憤激を買ひ、ついに脱退にいたる。さらには、弟子の女性作家との関係のスキヤンダルを『萬朝報』などに報じられ、坪内逍遙らの批判を受けて次第に文壇から疎外され排斥されてゆく。

こうして美妙が社会的に不遇をかこつようになった後、三〇年代に入ると内外出版協会の山県悌三郎と親しく交わり、その恩顧を受けるようになる。山県は、アメリカへ遊学して帰国のち、明治二八年に近衛篤磨を会長とし、戸水寛人と自身が委員となって「東洋青年会」を組織していた。それは、日本、中国はもとよりタイやインド、フィリピンなどの青年を集めて、アジアの連帯を築き繁栄を目指すものであり、いわば大東亜共栄圏構想の先取りであった。

明治三一年（一八九八）六月末にマリアノ・ポンセラが来日すると、ポンセに会ってリサールのことを知った山県は、その死をいたむために盛大な追悼会を青年会館で催すとともに、ポン

セの活動を積極的に支援した。ボンセの努力は、宮崎滔天や犬飼毅らの尽力によって村田銃を始めとする武器弾薬の購入へ、さらに憲政本党の代議士である中村弥六の仲介によって三井物産所有の老朽船布引丸の購入へと実を結んだ。しかし布引丸は、長崎を出港した二日後の三二年七月二一日、暴風雨のために浸水転覆し、一万四千丁の銃と五〇〇万発の弾薬、および革命参加を志した日本人志士数名の命が失われた(塩田: 269-274)。

ボンセは、フィリピン独立運動と革命政府について日本人の理解を得るため、その概略について記した『南洋の風雲』(宮本平九郎・藤田季莊訳一九〇一)を出版している。第一章「比律賓獨立戦争の起因」から説き起こし、獨立の宣言をへて「マローロス市に於ける比律賓共和国議會の開設」(第一章)にいたるまでの建国の過程を詳細に説明し、共和国政府の正統性を主張し、アメリカの不当な干渉と攻撃を激しく批判し糾弾している。

さらに稿末には、共和国憲法の概要を説明した後、憲法の全文を掲載している。それは、フィリピンが近代の獨立国家たる体裁を十分に有していることの証しであり、「我憲法を一讀する時は直に比律賓人民及其政治家の眞価如何を判定し得べし」だからであった。付録の「志士列伝」では、アギナルド、デル・ピラール、ホセ・リサルららの経歴と貢獻を解説する。リサルに関して「は、伝記解説のほか『ノリ・メ・タンヘレ』や『エル・フィリプス・ステリスモ』の内容紹介、さらには「最後の別れ」のスペイン語全文とその翻訳が載せられている。

美妙は山県を通じてボンセとも個人的に親しく交わり、彼を通じてフィリピン革命の詳細に関する知識を得ていた。そしてフィリピンへの同情とアメリカへの義憤から、フィリピン革命に関連

して幾つかの著作を執筆している。まず、『言文一致文例』(一九〇二/二)のなかに「義軍の宣言」を収録し、アギナルドについての紹介と論評をするとともに、その獨立宣言の辞を翻訳し、もって一般の演説文の模範としている。続いて政治小説『桃色絹』(一九〇二/八)を著わし、革命軍司令官のグレゴリオ・デル・ピラーを主人公とする獨立戦悲話を物語る。

その内容は、獨立派の志士ピラールは、スペイン官吏の娘ドロレスに密かに想いを寄せていた。ある日、ラ・ソリダリダッド新聞の切り抜きと陰謀の書類、そしてドロレスの写真を入れた大切な紙入れを落としてしまう。それを拾ったドロレスは、革命の志士たちが暗殺目標の第一に挙げる悪辣なスペイン人徴税官吏の愛娘である。しかし、ドロレスは、デル・ピラールらの企てに理解を示して紙入れを返し、ふたりは互いの想いを初めて確かめあう。

デル・ピラールは、ドロレスが革命の謀議を密告しないことに恩義を感じ、彼女の父親に対する暗殺計画を教え、逃亡のための通行鑑札を与える。それに感謝してドロレスは、逆にスペイン政府がその計画を察知しており、アギナルドの暗殺計画があることを教える。その一連のやりとりを見ていた者が志士たちに報告し、デル・ピラールは窮地に陥りそうになるが、アギナルド自身がデル・ピラールを信じ続け、窮地を救う。

それに恩義を感じたデル・ピラールは、アメリカ軍との戦闘の際に、ちょうど新田義貞に恩義ある小山田高家が敵軍を引き付けて奮戦して新田を逃したように、部隊のしんがりをつとめ、アギナルドを無事に逃げ延びさせる。しかし、その戦闘で自身は銃弾を胸に受けて致命傷を負い、その傷口をドロレスから贈

られた桃色のハンカチで押さえて死んでゆく。戦火を避けてスペインに戻ったドロレスは、そのことを新聞で読み、悲嘆のあまり泣き伏して終わる。

すなわち、『桃色絹』は、革命における悲恋の物語であると同時に、それ以上に、デル・ピラルとドロレスと、さらにはアギナルドとのあいだの至誠と信頼、恩義と報恩の物語である。そしてデル・ピラルには、小山田の例をあげて「日本の名誉の花たる武士道」を語らせているの。小説とはいえ、フィリピン現況と革命のリアリティーを欠き、ボンセの客観的で説得力のある著作との乖離は大きい。

それに対して、同じく明治三五年に出版された『あざなると』は、共和国の初代大統領となるアギナルドの人となりから筆を起こし、武装蜂起と香港への亡命、リサールの生涯と処刑、さらにはアギナルドの香港からの帰国と戦闘の再開、ボニファシオとの指導権争い、アメリカとの戦争、そしてパラナンにおける捕縛まで、多少の潤色はあるが、おおよそが客観的に革命の推移が叙述される。

史実の記述を縦糸としつつ、重要な出来事の場面では、当事者の直接話法の会話によって臨場感をもちあげる。さらにはアギナルドやリサールの人物、思想、業績、行動を客観的に説明し、評価する評論にも多くの頁をさいている。すなわち本書は、歴史叙述であり、小説であり、戯曲であり、評論でもあるという、ジャンルを越えた試みであり、才子美妙の力量を存分に発揮している。

ただし、アギナルドの革命・独立戦争の全体的な経過を構成的に示すというよりも、叙述の前後を無視して別の話題へ飛んだ

り、アメリカの帝国主義を美妙自身が激しく論難したり、当然説明すべきところを省略したりして、作品としての完成度はかならずしも高くない。筋の展開は、ほぼ歴史事実にもとづいているので、その紹介は省略する。ここでは、美妙がフィリピンをどのようにイメージし、具体的にどのように描いたかについて検討する。

執筆の動機は、後援者の山県悌三郎にあてた献辞のなかで次のように述べられている。「同じ人類と生まれながらわれわれの南の隣友たるフィリピン人が普通人以下の待遇を世界から（何のいわれがあるのでもなくて）無法にただ受けるのを見るにつけ、またわれわれの先祖の幾人かは随分そのフィリッピンには骨を埋めておいたとの事実を歴史に教えられるにつけ、腕はただうずく、胸はたださわぐ、筆はただふるえる、それをいくらかたでもらしたばかり、フィリッピン問題について、その一着としてついにこのような書物を作ることとなったのです（以下略）」

しかし、それは単にフィリッピンに対する同情から発したものではなかった。アギナルドを主人公とする本書において美妙は、アギナルドを手放しで誉めたたえているわけではない。迫害の酷熱を受けて、リサールは炭素から金剛石へと変身し真の大勇を有したと高く評価するのに対して、アギナルドの勇はむしろ無法の勇に近いと述べている。革命結社カティプーナンに人々が多く参集したのは、第一に圧政の苦しみと不満であるが、それが革命という爆発にまでいたるのは、アンチング・アンチング（護符）の効力に関するアギナルドの出まかせ宣伝によるものであるとしている。

さらには、アギナルドがアメリカを尊崇し買いかぶるあまり、その甘言に乗せられ、いかにも巧みに欺かれ、革命を頓挫に導いたことに関して次のように激しく批判している。「その時君が米人の甘言に迷わされたればこそフィリッピン全国今日の様な悲しいありさま、今も鉄血馬蹄にさいなまれて、しかも、文明世界とかいう世に殆どありそうにも思われぬ虐殺などの憂き目に一般の人民は無残にも逢わされているのではないか(173)」

もちろん、同書の目的はアギナルドを糾弾することではない。山縣への献辞と続く「まえおき」のなかで、美妙は次のようにも述べている。

世は気楽なもの、鳥は今銃殺されるのも知らず仲間の食を奪って喰う。国は今亡びるのも知らず、他の窮厄を余所ごとにして笑う。すこし克てばすこしぬ惚れる。……われわれはフィリッピン問題をもつて決して等閑には見ず、未来の世紀に早晚必ず起こるとわれわれが信ずる人種偏頗の一大衝突、全世界を阿鼻地獄の毒瓦斯に包んでしまう日のあるのを実に思い切つて今から予言し、絶叫しようと思ふ(9,18)。

すなわち、美妙にとつて、本書はボンセをとおして知つたアギナルドやリサルらフィリッピンの愛国者と革命の志士に対する精神的な連帯と支援の表明であり、革命の挫折とフィリッピン人の窮状に対する同情の表明であつた。しかし、それと同時に、日本の読者に対しては、フィリッピン問題に対する関心の喚起であり、フィリッピンにおける革命の経緯と頓挫を見ることをとおして、弱肉強食の世界秩序のなかで、日本の明日の危機に警鐘を鳴らそう

とするものであつた。

文壇主流から徹底的に排除され周縁化され、それゆえに自己を弱者と考える美妙のアイデンティティー自認が、フィリッピンへの関心と同情を生んだといえる。しかし美妙は、弱者としてあくまでフィリッピンと連携するのではなく、国家主義者としてのもうひとつのアイデンティティーから日本の将来を危惧するとともに、フィリッピンに対しては連帯と自立への支援ではなく、フィリッピンの庇護者としての立場をとるのである。あるいは、模範と庇護を求められる兄や師として日本を描くのである。

たとえば、アギナルドが革命から一時離脱して逃亡をはかるアギナルドの亡命先として、香港ではなく、東京でありえた可能性を論ずる。それは、「一九世紀の利器を用いて一九世紀の義戦を行なつた旭日の国として」また「朝鮮問題が本で支那を辛い目に合わせながらも、一兵卒にいたるまで悉く仁道の師、義戦の兵たる心得をもつて仁と武において名声の世界に噴々たるまでになつた日本」に対して、アギナルド自身が強い憧れをもつていたからであるとする。その証しとして、美妙は、革命軍の旗と徽章が日の丸を土台とし、帝国の連隊旗を模して光線を放射するデザインとしたこと、さらにはそれを国旗としたことを指摘し、次のように続ける(57-58)。

嗚呼フィリッピン人がそのような旗を用いたのか、その旗がこの頃は勇ましく翻ることもできなくなつたのか。われわれはこのために実に泣く。ただ一つの道、一つの情、この二つの点から泣く。道から云うか。自由意志を強圧される不条理はないものを。情けから云うか。われわれの帝国の威を

仰ぎ、われわれの天皇の徳を慕い、われわれの国民の義をなつかしんで、われわれと同じ文明の歩調をとろうと渴望するものを。さらに一步を進めて云えば、彼らフィリピン人が、一種不可言、不可説的の情愛をわれわれに寄せようとしていたもの(3758)。

すなわち、美妙は、有り得た歴史としてアギナルドの日本亡命と日本の支援によるフィリピンの独立を夢想するのである。アギナルド自身の日本観はともあれ、ボンセが日本の支援を得るために、日本の志士たちに、あるいは上に紹介したような日本への畏敬と慕念をリップサービスとして語ったかもしれない。しかし、それ以上に、日清戦争の勝利によってもたらされた自信に美妙もまた酔っていたからであつた(8)。

さらに美妙は、リサールの生涯を詳述し、その人物の度量と愛国心を高く評価し、惜しみない賛辞を贈つたあとで、語学の天才リサールが、日本語を学び、日本の古代史および日本とフィリピンとの交流史を研究したこと、さらにはリサールが明治維新以後の日本の飛躍に興国の念を励まされ、それゆえ日本には格別の敬意と親近感を持っていたことを説明する。(ただし、リサールが一度も日本に来たことがなかったと事実誤認をしている。)その後で、日本がフィリピンの庇護者となるべきことの必然性を、前節で見た鉄腸と同じく、両国民の血縁の絆に求めるのである。

永正以後、すなわち足利氏の末の頃から意気軒昂で豪胆な日本の男児は、粗末きわまる船で南洋に渡り、フィリピンやボルネオなどで「その鵬翼を逞しくして、奪掠を思いのままに」していた。それゆえ、「今のフィリッピン人(は)、日本人の末葉、日本武士

の血を承え継いだものは実に多い」。しかもリサールは、日本人の略奪に旧怨を思うよりは、それによって日本固有の開化文明を移し植えられ剽悍堅忍のフィリッピン気質のできるに至ったことを逆に徳としている。それゆえ、もし、その頃に日本国の將軍が十分に後援を加えていたならば、「南洋の群島は実に三〇〇年前から日本の所有となつた」はずである、と結論するのである(3814)。

しかも、「日本人は、リサールがまずそれほどこちらを思ってくれた好意に対して、いかなる好意をもってこれに酬いたか」との疑問を呈し、同情あり、仁義あり、血あり、涙ありと言われる日本人ならば、フィリピンに目を向け、それを助け、属領とするように示唆する。フィリピンにおける実際の革命と、日本に対する志士たちの支援の期待を逆手にとり、日本の進出の好機としてそこでの革命の達成を夢想するのである(9)。

5 おわりに

菅沼貞風、末広鉄腸、山田美妙、押川春浪の著作の執筆年は、実際のフィリピン革命をはさんで二〇年ほどの隔たりがある。菅沼が「新日本の閩南の夢」を書いたのは一八八八年であり、フィリピン革命どころか、フィリピンにおける民衆反乱についてもほとんど知識がなかった。鉄腸が『南洋の大波瀾』を書いたのはアメリカとイギリスからの帰国後の一八九〇年であり、フィリピンに関する知識はリサールを通じたものに限られ、実際のフィリピン革命の勃発を具体的に予想していたわけではない。美妙と押川だけが、フィリピン革命の顛末を知った上で執筆している。しかし美妙にはいくつもの事実誤認があり、押川

は革命の経緯とフィリピンの実態にほとんど関心を持っていない。

にもかかわらず、彼らのあいだに、なぜ日本がフィリピンに着目し、フィリピンに進出するべきかという問題意識と、その正当化の根拠が等しく共有されている。すなわち、弱肉強食の世にあつて、欧米列強と対等に伍してゆくため、日本の完全なる独立のためにこそ、フィリピンのスペインからの離反すなわち革命と独立、その後の日本による属領化あるいは植民化が夢想されているのである。

フィリピンに介入すべき理由としては、かつて鎖国令が出される以前に日本人が大挙してフィリピンへと渡航し、そこに住み着いたという歴史的な事実があげられている。美妙においては、そうした歴史、血縁関係とともに、アギナルドもリサルもともに日本を尊敬し、憧れ、彼ら自身が日本からの支援と介入を望んだことが指摘されている。

さらにその後、押川春浪の武俠六部作(一九〇〇—一九〇七)にいたっては、単に血縁の絆ということよりも、ロシアや米国の侵略主義に対抗して東洋民族の間に一大団結を形成するためであり、武俠を生命とする者の責務であることが強調される。第二部『武俠の日本』(一九〇二)においては、西郷隆盛が実はフィリピンに逃れており、二〇有余年を塵外に微吟したのち、アギナルドに見出され、慕われ、乞われて軍師となつて革命を指導したとされる⁽¹⁰⁾。

アギナルド自身の言葉を借りれば、「大西郷は、西南戦争の後、いまだ死せず、ひそかに比律賓に身を隠し、幾年月の間バイアン川の麓に風月を友として、静かに天下の大勢を洞察して笑つてを

られたのを、われわれは、その高風を慕ひ、遂に、獨立軍の大軍師と仰ぐことになったのです(1902:152)」というのである。

西郷に指導を受けているあいだ、革命軍は南洋の微々たる一軍隊であつたにもかかわらず、「その動くこと雷電の如く、世界の大国北米を相手として、常に華々しき勝利を占めて」いた。しかし、陰險卑劣な米国軍は、国際公法と人道を無視し講和談判のためと騙して西郷をサンバレスの陣中に招き、たちまち捕虜としてロシアに引き渡す。軍師西郷の知恵を失つた後は、「彼の形勢忽ち一変し、奇傑アギナルド將軍の武勇を以てしても、如何ともする能わず、比律賓獨立軍は、西風落日の運命に、陥つてしまった(1902:153)」。「実際のフィリピン革命の一時的な成功さえも、西郷の指導のおかげとされるのである。

敗色濃くなったアギナルドは、小汽船でフィリピンを脱出するが、米艦に追跡され、パラワン島沖合いのセント・エミリヤ島近くであやうく攻撃されかかる。その寸前、ロシアに撃沈されたはずの日本の海底戦闘艇(第一部『海底軍艦』参照)が現れて米艦を撃沈し、アギナルドの一行を救う。そのなかには、デル・ピラールの恋人であつたホーセ・ドロレスと革命軍の青年将校リオネル少尉がいる。この三人のフィリピン人は、その後、かつて西郷の片腕となつてフィリピン獨立軍を助けた、ライオンを伴とする蛮勇俠客・段原剣東次を補佐して、シベリア奥地に幽閉された西郷の居場所を突き止め、救い出す作戦を手伝う。その一部始終が第六部『東洋武俠団』の主題であり、幽閉監獄への段原剣の突入と空中軍艦の救援によって無事に西郷を解放救出するところでクライマックスを迎える⁽¹¹⁾。

本稿で取り上げた論者たちが主張するように、たしかに日本とフィリピンとの関係は、スペインの来航以前にさかのぼると推定される。実際、南洋日本町の歴史を詳細に研究した岩生(一九九五)によれば、南洋各地において日本人の移住の起源が最も古く、その人口が圧倒的に多く、かつその活動が目覚ましかったのはルソン島であったという。それは日本人南洋発展の実に先駆をなすものであった(211)(12)。

さらにフィリピン革命の勃発の年に出版された民友社編纂の『比律賓群島』(一八九六)も、日本とフィリピンとの交渉史をふりかえり、そこが三〇〇年前の冒険者である「吾人の祖先の故郷であり墳墓であった」ゆえに、しかも地理的な近接のゆえに、植民計画を立てすみやかに実施すべしと説いている(210)(13)。そうしたことに備えて、同書は、フィリピンの概況を、歴史、政府・地方・マニラ市の行政組織、支那人、回教徒、その他の諸民族の特徴、商工業および物産などの概況を各章に分けて説明する。なかでも興味深いのは「第9章 開化せる土民の性質」のなかの、フィリピン人の性格や特徴に関する以下のような説明である。

土民は概して其性改進を好まず、賭博を嗜み、容易に約して容易に破る。其過失を隠蔽する、小と雖ども敢えて自ら告白せず。…上等の土民と雖ども、好意上の惠與といへることに對し、感謝を表すこと豪もなく、惠與を以て美德とすることなし。故に外人来りて、物を土民に贈るとあらば、彼れは之を以て愚呆の行為となして輕蔑す。奇と謂ふべし。

又土民は借財を以て羞づべきこととなすの感なし、一たび借れば、我自ら勞して得たるもののごとく、返済す

ること殆ど罕れなり。又上下となく、虚言を以つて罪とせざるものの如し、虚言を發覺せらるるときは、唯其目的を達せざりしを遺憾とするの能あるのみ。次第に論詰すれば、次第に其の辞を變轉し、其前に陳せし所、眞赤なる虚言となりするも、平氣平心豪も頓著することなし。

土民概ね怠懶にして、呆然静坐し、一事をなさずして日を送ると多し。物を造るに、前金に非ざれば決して着手せず。人に面従し易しと雖ども、心服せしむること至て難く、外面友情ありと雖ども、内実信義に乏しく、沈黙なりと雖ども秘密を保つ能はず、一事の刺撃に奮發し易きも、久しからずして果斷力を失ふ(119-120)。

ここに上げられたフィリピン人の諸特徴、つまり怠惰で、平気で嘘をつき、感謝や恩を感じず、表面的には社交的で愛想がよいが、面従腹背して信を置けない等々は、これ以後、戦前、戦中(たとえば板垣一九四三)、戦後(たとえば中川一九八六)をとおして現在にいたるまで、一貫して変わらぬフィリピン・イメージとなる(詳しくは清水、一九九八参照)。フィリピン人とフィリピン社会の特徴がどのように説明されてきたか、それらがフィリピンをめぐる言説空間のなかでどのように繰り返され、再生産されてきたかは興味深いテーマであるが、紙幅の余裕がないために検討は別稿にゆずる。

最後に指摘したいことは歴史の誤用についてである。フィリピンへの植民Ⅱ移民を積極的に説き、南進論の先駆者となった菅沼の議論は、しかし当時出版されることがなく、同時代の政治思想や外交政策には直接の影響をあたえなかった。それは

手書きの原稿のまま保存され、五〇年以上も過ぎた一九四〇年に、彼の主著である『大日本商業史』が岩波書店から再刊された際、初めて併録されて世に出たのである。それは日本が太平洋戦争を開始する一年前にあたり、南方進出のイデオロギーを補強する効果を狙ったものであった。また、フィリピン軍政が始まった後の一九四二年には山田美妙の『あぎなると』が全文復刻され、解題を付して出版された。さらに、押川春浪の武俠六部作も『押川春浪選集全8巻』のなかに収録されて一九四四―四五に再刊された。

さらには、マリアノ・ボンセの活動によって、革命を支援するための武器弾薬を満載して長崎を出港した布引丸が、途中で嵐にあい、転覆、沈没した事件を題材にしたドキュメント小説が木村毅によって書かれ、一九四二年九月から翌年一〇月まで『明朗』に連載された後、一九四四年に出版された(『布引丸フィリピン独立軍秘話』)。その連載中の一九四三年二月に、木村は各宮家の懇親会に招かれ、「明治天皇とフィリピン」という題で進講をしている。さらには、その頃リサールの伝記が何種類か続けて出版されている。(毛利八十太郎『ホセ・リサル』一九四一、花野富蔵『ホセ・リサル伝』一九四二)

フィリピン革命の前後において、フィリピンに関心を持ち、そこに日本の明日の可能性を見出そうとした知識人の夢や構想は、その当時の社会思潮に直接の影響を与え、ともに、それから五〇年あまりを経て実際の戦争の精神的な準備と動員を進める際に、再び注目され、再評価され、利用されていったのである。

参考文献

- 波多野勝 八八『フィリピン独立運動と日本の対応』『アジア研究』三四巻四号。
 早瀬普三 九六『フィリピンをめぐる明治期「南進論」と「大東亜共栄圏」小島勝(編)『南方関与の論理』「総合的地域研究」成果報告書シリーズ・No.27。
 池端雪浦 九八『フィリピン革命と日本の関与』池端雪浦、寺見元恵、早瀬普三『世紀転換期における日本・フィリピン関係』東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所。
 板垣興一・他(編) 九四『南方年鑑・昭和十八年版』東邦社。
 岩生成一郎 九五『南洋日本町の研究』岩波書店。
 木村毅 九八『布引丸：フィリピン独立軍秘話』恒文社。
 小宮山天香 九七『冒険企業・聯島大王』柳田泉(編)『明治政治小説集二』筑摩書房。
 民友社(編) 八八『比律賓群島』民友社。
 中川剛 九八『不思議のフィリピン：非近代社会の心理と行動』NHKブックス。
 日南居士 八八『フィリピンヌ群島ニ於ケル日本人』博聞本社。
 小熊英二 九五『単一民族神話の起源：へ日本人への自画像の系譜』新曜社。
 押川春浪 九四『海底軍艦』石書房。
 九四『武俠の日本』石書房。
 九七『武俠艦隊／新造軍艦』桃源社。
 九七『新日本島／東洋武俠団』桃源社。
 サイド、エドワード 八八『オリエンタリズム』平凡社。
 Sarnat, Michael, 1991, "In Our Orientalist Imagination: Historiography and the Culture of Colonialism in the United States," *Radical History Review*, Vol.50.
 Samuel, Josefa M., 1969, *Japan and the Philippines: 1868-1898*, Quezon City: University of the Philippines Press.
 志賀重昂 八八『南洋時事』丸善商社。
 塩田良平 九〇『解題』山田美妙『フィリピン独立戦話・あぎなると』中央公論社。
 清水展 九八『未来へ回帰する国家：フィリピン文化の語り方・描き方をめぐって』『立命館言語文化研究』9巻3号。
 末広鉄腸 九七『南洋の大波瀾』柳田泉(編)『明治政治小説集2』筑摩書房。
 菅沼貞風 九四『大日本商業史』岩波書店。
 九四『変小為大転敗為勝・新日本の図南の夢』菅沼『大日本商

業史」岩波書店。

山田美妙 九〇『桃色絹』青木嵩山堂。

—— 九〇『フィリピン独立戦話・あきなる』中央公論社。

柳田泉 九四『海洋文學と南進思想』ラジオ新書。

—— 九六『日本文学におけるホセ・リサル』木村毅『ホセ・リサルと日本』アポロン社。

—— 九七『a』政治小説の一般(二)「解題」柳田泉(編)『明治政治小説集(二)』筑摩書房。

—— 九七b『b』政治小説研究・上巻』春秋社。

—— 九八『c』政治小説研究・中巻』春秋社。

矢野暢 九七『日本の南洋史観』中公新書。

(1)彼の目に映る世界情勢は、「新希尼亞既に独逸に挫け、安南已に仏蘭西に入る。い
わんや魯細亞の浦潮斯德港を開き、西伯利亞鉄道を敷かんとするあり。樺太既に
彼に奪はる。蝦夷豈虞なしとせんや。況や支那が軍備を拡張して漸やく富強を謀
るあり。朝鮮將に彼に折れんとす。琉球豈憂なしとせんや(96)」というものであつ
た。

(2)鉄腸は、第一の路線では、表面的な猿真似に終わり、欧米の尊敬を得られないど
ころか、返つてその属国的な色彩を帯びてしまう怖れがあるとし、第二の路線で
国家弱体のままアジア進出などを試みては、独立の達成どころか、逆に国を危う
くするものになりかねないと批判する。

さらに鉄腸は、戦争の害を最も大規模な飢饉天災以上の悪と極言し、将来、国
力の発展に伴い戦争を避けることができない事態が生ずることがあるにしても、と
りあえずは可能な限り戦争を避け、対外平和を維持することを主張した。さらに
鉄腸にとって、欧米に対する日本の独立確保は、単に東洋の一小国たる日本だけ
の問題ではなく、日本の安危は東洋の安危と分かちがたく結びついており、それ
ゆえ、日本対西洋の問題は、すなわち全東洋の問題でもあった。そして、当面の
西欧人の侵略への対処法という課題に対しては、東洋諸国の合縦連衡の一途ある
のみとした(98:394-95)。

(3)その段で鉄腸は、「(寶籠島に)居住する蠻民は、往昔日本より渡海したるもの
子孫と云ひ傳え、如何にも剽悍猛烈にして、巧みに利剣を鍛練して撃剣の技に長
じ、同人種の酋長を戴いて屢々西班牙人と戦争を為す(末廣に2)」との説明を加
えている。後に見るように福本の説明をそのまま流用しているのである。

(4)本書の序文にも以下のように記されている：

余の前年西洋に遊ぶや、魔尼羅の一紳士と相識る。此の紳士は、竊かに群島の
独立を謀りて成らず、捕われて獄に下らんとし、脱して海外に走れり。余が為
に西班牙政府植民政略の其の当否を失ひ、群島人民の激動する有様を時、人
をして悲憤慷慨せしむ。一日紳士の寓に於て一女子の写真を観る。明眸皓齒、
楚楚として人を動かすの状あり。而して其の容貌は、宛然たる日本人なり。之
を問へば慘然として曰く、我が婚約を約せし魔尼羅の貴女なり。余は万死を出
でて国を脱せしをもつて、この情人を携帯する能はざりしと。数月の後紳士に
逢ひ、君が故郷にある情け人の恙なきやを問ふ。紳士曰く、頃日音信を得たり。
余の海外に飄泊し、其の婦朝なきを以て、遂に家を棄てて尼寺に入りて説き
畢り、自ら悲哀に堪へざるものの如し。余も之を聞いて為めに袂を湿はし、竊
かに謂へらく、此の紳士と貴女とは、多情なる才子の筆に成る小説中の人物
と如しと。頃日偶々観する所あつて、一の政治小説を著わさんとし、遂に此の
紳士貴女の事実を敷衍して、之を南洋の大波瀾と名く。一少年の時事に慷慨す
るより起こつて、緋笠濱群島の日本帝国の附庸となるに畢る(10:15)。

(5)福本は、明治二年に菅沼貞風と明治二年の夏に会い、国威伸長のための
外交・貿易の併進策で意気投合し盟友となる。菅沼の後を追ひ、明治二年五
月にマニラに渡るが、その直前の四月にこの本が出版されている(早瀬10)。
菅沼の『大日本商業史』の脱稿は二年でも、その出版は菅沼の死後の明治二
五年である。さらに『新日本の図南の夢』の刊行は、昭和十五年である。した
がつて鉄腸は、『南洋の大波瀾』の執筆の際に、菅沼の両著作は未見であつた
可能性が高い。

(6)スペインの植民地支配の末期にいたるまで、タガログやイロカノやビサヤな
ど個々の地域・言語グループへの帰属意識を越えて、フィリピンという共同体
に属するという意識はなかった。フィリピン人という名称も、本国(イペリア
半島)生れのスペイン人と区別して、フィリピン諸島生れのスペイン人を指し
て用いられていた。支配者であるスペイン人は、フィリピン諸島の土着の人々
をインディオと総称した。また、大半が男性であった中国人移住者(およびス
ペイン人)と、現地の女性とのあいだに生まれた混血の子供たちは、メス
ティソと呼ばれた。現在のような意味でのフィリピン人というカテゴリー
は、一九世紀半ば以降、スペイン支配に対抗する民族意識の覚醒と高揚とともに
に生まれてきた。

(7)さらには、デル・ピラールの口を借りて、次のように日本に対する不当に低
い扱いを嘆かせている。「文明と誇り、開化と称しながら人種によって偏頗を

おこなひ愛憎をことにするのが白人とか自称するものども、…例は遠くを見るまでもなし、近くは北の日本帝国、その開化のあれ程の程度まで発達して居るにも拘はらず、その文武の進歩はあれほどの處まで進歩して居るにも拘はらず、それが黄色人種たる故をもつて歐米人には異種類の動物、野獣より些しは優つた位に思はれて居るのではありませんか。…戦争に克つたといふ餘勢の有る日本帝国でさへそうです(71-72)。」

(8) ただし、池端によれば一八九〇年代の後半を通じて、フィリピンの変革運動の側もまた、日清戦争に勝利した日本が、植民地支配にあえぐ近隣の国々に支援の手を差し伸べてくれるに違いないと考えていたといふ(30)。

(9) その際、アメリカのフィリピンに対する不当な介入と支配を、ジェンダー化した比喩のなかで強姦として描き糾弾している。すなわち、継母(スペイン)にいいじめられ残酷な待遇を受けている少女(フィリピン)が、少しの自由を哀訴して逆により苛酷な扱いを招いてしまう。少女も堪忍袋の緒を切つて継母に反抗すると、速くからそれを見ていた少年(米国)が、少女を励まし、加勢するから親子の縁を切るようけしかける。しかし、実際そうしてみると、「何ぞはからんその少年は、最初甘言で少女を欺き、実は少女をわが食い物にして、おのれが獣欲を満足させようと思っているのである。少女は戦慄した、憤慨した、号泣した(97-98)』のである。

(10) その頃、アメリカのフィリピン支配の整備と安定が進み、そこで革命を夢想することの可能性や妥当性が失われていった。また春浪の関心も、ロシアとの対決の緊迫さへと移っていた。

(11) 物語はその後、帰還の途中で、日本の普通汽船・天龍丸を攻撃するロシア義勇艦隊・蛇牙児号を撃沈し、さらには、黒海方面へ向かう。そこで、かつて日本の守護となるべき軍艦「日の出」と「うねび」を不当にも撃沈した、ウルフコック中将の黒怪艦隊から、旗艦アゾウ号と新造巡洋艦リバーチ号を計略を用いて奪い取る。気づいて追跡してくる軍艦4隻を海底戦闘艇が種尾よく撃沈し、天空と海上に響く万歳の声で大団円を迎える。

(12) 日本人のルソン来航に関する最も古い記録は一五六七年であり、中国南部沿岸の海禁を避けた倭寇が、ほとんど毎年のようにカガヤン方面を侵襲していた。その後、スペインによる防衛が整備され、一六世紀の末までには平和的な交易へと変わる。主たる物品は、日本側からは銀、フィリピン側からは金、鹿皮および中国産の生糸・絹織物などであった。一五九五年には約一、〇〇〇人の日本人がいたという。彼らはイントラモロス東側に位置するデイラオ地区に日本人町を作り、どんなに暑くとも日本の厚ばった着物を着、日本料理の食事をし、日本語

を話して暮らしていたという。交易に従事するほか、小売商人、手工業者、水夫、下僕などとしても働いた。一六〇六年には一、五〇〇人に増えたが、一六〇七年の暴動を契機として町が焼き払われ日本人の居住者は激減した。しかし一〇年あまりで再興し、キリスト教徒の迫害によってマニラに来る日本人の増加とともに、一九一〇年代の末から二〇年代の前半にかけては、三、〇〇人あまりが居住していた。しかし一六三九年の鎖国以来、日本人の流入は途絶え、がてメステイソンとなって原住民社会に吸収されていった(岩生1999, Reed: 52-55)。

(13) なぜなら、スペインの圧政と搾取によって不平の徒が数多くおり、スペインのためにフィリピンを防衛する者はほとんどいない。しかし彼らは、あるいはスペインの旗章を総督府から一時的に排除することができるかもしれないが、独力ですべてを完遂することはできないから、他の白人国が奪い取る可能性が高い。ならば日本が出てゆくべし、というのである。